

ソーシャル・サポートにおける ホームステイの有益⁽¹⁾なサポートと有益でないサポート —留学生から見たホームステイ評価—

Homestays-Participants' Views: Beneficial support and non-beneficial support for international students in Japan

原 田 登 美

要旨

本研究は、在日の留学生の体験に基づいて、ホームステイ（以下 HS と記す）に対する留学生の評価を調査・分析した結果である。HS のサポートについて、ソーシャル・サポートの観点から、内容分析と統計分析により、次の3点、① HS への満足度、②留学生が肯定的で有益なサポートだと評価する項目と否定的で有益でないとする項目は何か、③留学期間を通じてどのようなサポートが留学生にとって有益度が高まり、有益度が低下していくかの変化、に関する調査と分析を行った。主な結果は、1)86%の留学生がホームステイのサポートに満足し有益だと評価していること、2) 有益である場合も有益でない場合も含めて、HS をコミュニケーション能力、異文化接触、異文化理解そして異文化社会適応を高める場として評価していること、3) 前期から後期にかけて、時間の経過につれて、HS が「日本語コミュニケーション能力と文化と生活習慣を学習するサポートの場」から、「暖かい家庭と家族の提供サポートの場」へと評価が変化し、異文化適応が進んでいくことが認められた。

【キーワード】 ソーシャル・サポート、ホームステイ、在日留学生、体験に基づいたホームステイ評価、有益なサポートと有益でないサポート

Abstract

This paper examines the views of homestay by international students in Japan based on their experiences, and examines the support provided by homestay. Three points are taken into account,

- 1) the degree of student satisfaction,
- 2) what were positive and beneficial aspects, and what were negative and non-beneficial points provided by the homestay,

3) how did the students change their opinions through the first and second semester.

The research was conducted using questionnaires answered by international students in Japan; content and statistical analysis methods were used.

The results can be summarized as follows:

- 1) 86% of students were satisfied with and appreciated the beneficial support provided by homestay,
- 2) Students evaluated their homestay as an opportunity to learn and enhance their level of Communicative Proficiency, Intercultural Contact, Intercultural Understanding and Intercultural Adaptation whether beneficial or not,
- 3) Students recognized the homestay experience as an opportunity to develop Intercultural Adaptation and participate in a warm and kind family environment, to communicate in Japanese and to understand something of the culture.

【Keywords】 social support, homestay, international students in Japan, evaluation on homestay based on real experience, beneficial support and non beneficial support

1. はじめに

大学生の留学には、以下の3点の目的と課題がある。すなわち、1) 外国語の習得、2) 異文化コミュニケーション・異文化接触および異文化理解の体験、そして青年期後期にある大学生の留学を特徴づける3) 人間的成長と自己形成という課題である。このような留学の目的と課題を遂行するために、留学ではいかなる滞在形態が望ましいのか。

上記のような留学目的を実現する方法として、本論においては、留学滞在形態としてのホームステイ（以下、HS と記す）を取り上げ、留学生の体験に基づいたHS 評価の調査を行い、ソーシャル・サポートの観点から、HS のサポートの中でも留学生が肯定的で有益なサポートだと評価する項目と否定的で有益でないとする項目について分析と考察を試みる。また、留学期間を通じて、どのようなサポートが留学生にとって有益度が高まり、有益度が低下していくのか、その変化を捉え変化の意味を考える。

折りしも、日本では2020年を目途に留学生30万人の受け入れを目指す「留学生30万人計画」が提案されている。多くの留学生が日本に勉学にやって来て、日本人との対人関係を築き、日本語コミュニケーション能力を向上させ、異文化社会環境に適応していくことを目指すが、留学が有効に機能し成果を得るためには、様々な側面からのソーシャル・サポートが必要になる。

母語や母文化の暮らしから移動し、異なる言語と社会・文化の中で暮らす留学生活においては、社会文化的な諸側面で、不確実で不安定な要素を体験することが多く、心理的・精神的・健康的な不安に対処する方法として、ソーシャル・サポートの果たす役割は大きい (Fontaine, 1986, 361)。不確実要素に伴う不安の多い留学生活の中で、HS が果たすソーシャル・サポートの基本的な機能は、留学生とホストファミリーの双方において、「お互いの不確実性を取り除いていくプロセスの中に見出される」 (Adelman, 1988, 185) と捉えられる。異文化修正接触仮説²⁾ (Amir, 1969, Klineberg & Hull, 1979) では、「留学生が、滞在している国の文化や人々と接触し社会的相互作用が多いほど、その社会に対する対応がより円滑に進む」 (Takai, 1991, 228; 田中, 1998, 147) と言われる。その意味で、留学生がホストファミリーと毎日の生活を共にしながら、互いの接触を通じて、暮らしの中で双方の不確実要素を取り除きつつ、日本社会への適応と異文化理解と人間形成を進めていけるという点で、HS という形態は極めて有意義な留学での滞在方法だと思われる。

本論において調査した K 大学の留学プログラムでは、1976年のプログラム開設以来、留学での滞在形態として一貫して HS が推奨されてきた。留学の目的と課題である日本語の習得・異文化理解・人間的形成とその成長を促す方法として、HS が最も有効な滞在形態であるとして採用されてきたのである。しかしながら、それが果たして実際に留学生にとって満足な方法であり有効だと評価されているのかどうか、評価されているとすれば、どんな点が評価され、問題があるとすればどんな点が問題とされているのか。これまで本格的な調査と研究がなされないままに過ごされてきた HS についての評価を、本論では教育と研究の観点から、上記の諸点について学生への直接的な調査を試みた。

本研究の意義の一つは、大学での留学プログラムの実施が盛んになり、大学生の世界的な移動が日常的に行われる現代において、留学の目的と課題を達成する上で、滞在形態としての HS の有効性を留学生自身の評価により検証することである。また、第二の意義として、HS についての本論のような調査と分析は、これまで留学生や留学を対象とする研究分野ではあまり議論や分析が行われていないことから、留学生活における滞在形態としての HS の意味を探ることにある。そして第三の意義として、本論の研究結果は、今後の HS のありかたと留学生へのソーシャル・サポートに関して、多くの視点と示唆と情報を与えてくれることである。

本論の調査参加者は主として欧米諸国からの留学生、それもアメリカからの留学生が多い。その理由は、この留学プログラムがアメリカの大学との協定に始まったことに由来する。その意味から、本論の研究調査は欧米諸国からの留学生を中心として見た HS 評価となっているが、そのような視点での研究調査も在日留学生の一環として意義あるものと考えられる。

2. 先行研究

2.1 留学生へのソーシャル・サポート

ソーシャル・サポートとは、自分の周囲にいる人たちから得られる物理的、心理的援助を指し、個人の精神的安定や健全に不可欠の要素と考えられる（浦，1992；マグワイア，1994；スコット，1989）。ソーシャル・サポートは「社会的支援」とも呼ばれ、情動的、評価的、手段的、情緒的の四つのサポートに分類される（House, 1981）。ソーシャル・サポートは既に形成された一定の内容を指すものではなく、日常における人間同士の係わり合いのなかで生じる小さなサポートの集積とも説明できる（徳永，2005）。徳永によれば、留学生へのソーシャル・サポートとは、「健康的な留学生生活を保障し、日々の生活のなかで自らの力で問題解決できるような力を育むために大きな役割を果たすもの」（P.2）を意味する。

留学という新環境への移行においては、ソーシャル・サポートを獲得できる対人関係の形成が適応を促進するといわれる（Adelman, 1988；田中，2000；八島，2004）。Adelmanは、「自分の母文化での知識が常にあてはまるわけではない不確実性の多い他文化の中で、ホストの視点による帰属性を持つことで、自分は一人ではないと知ることにより、不安感や犠牲感が少なくなる」（同上：188）と述べている。さらに、Adelmanは、ソーシャル・サポートの先行研究を集中的にレビューする中で、サポートの受容者と供給者の双方において、不確実性を取り除いていくプロセスの中に、ソーシャル・サポートの基本的な機能があることを指摘し、「ソーシャル・サポートによって得られた、日々の生活についての精神的な安定と生活基盤は、異文化環境でのストレスを低減し異文化での習慣や文化の違いを乗り越えて、日常生活に対処していくエネルギーと精神的余裕をもたらす」（同上：185）と述べている。

2.2 第二言語習得におけるホームステイの役割

Knight & Schmidt-Rinehart（2002）によれば、世界の大学の外国語学部では、学生に対し、留学先において、言語的、文化的習得の最も高まる方法として、HSを奨励しているところが多いと言う。St. Martin, Gail M.（1979）は、英語の集中講座のためにアメリカの家庭に14週間HSをした83人のメキシコの学生の成績を、HSをしなかった学生の成績と統計分析により比較した。その結果、HSをした学生のTOEFLの成績はHSをしなかった学生の成績より高い得点となり、HSをしたことが成績向上への最大要因になるという相関関係を得た。言語能力を獲得するには、その言語が使用される環境に住むのが最善の策だという仮説を裏付ける研究であり、HSをした学生の第二言語習得が伸びるのは、くつろいだ雰囲気とネイティブと会話練習をすることに拠るものであり、外国語学習がHSにより高く動機づけられることを示唆するものであった。

Hashimoto（1994）では、オーストラリアの高校生の日本滞在を通じて、ホストファミ

リーがいかに自然な日本語の供給源となって高校生の日本語習得のためにサポートをしていたかを報告している。高校生がホストファミリーとの会話を通じて日本語習得に多大な恩恵を得たことは言うまでもなく、HS 期間において、生活をする上で理解できない事が生じた時には、家族が入れ替わりで日本語による説明がなされ、学生の理解ができるまで何度でも繰り返されたことが、日本語習得に大きな貢献をしたという事例が紹介されている。

上述のように、留学生の立場から、HS での第二言語習得に関する効用を検証した研究がある一方で、Frank (1997) では、アメリカ人学生の第二言語習得のためのロシア留学に際し、HS について、驚くような否定的な調査結果が出たと報告している。例えば、学生はホストファミリーと一緒に暮らすことで、豊かで継続的な言語資源の input に取り囲まれるといった、それまでの HS 観についての予測と想定に反して、Frank の学生達は、HS 期間のほとんどの時間を一人で過ごしていたと報告した。さらに、Rivers (1998 : 492) は第二言語習得と HS 環境について、ロシアに留学し、寮と HS に滞在したアメリカ人学生の会話、聴解、読解能力を統計分析を用いて調査した結果、読解においては寮より優れた成果があったものの、会話と聴解能力は寮に滞在した学生より HS の学生が劣った結果となったことを報告している。Frank の研究によってもたらされた HS に関する否定的な印象は、Wilkinson (1997, 1998a, 1998b) のフランスに留学し滞在した7人の経験を分析した研究により、さらに強固な印象をもたらしした。Wilkinson は Frank と同様の環境で調査した結果、HS におけるイマージョン教育がかつて信じられた社会的な対人関係の相互作用や言語的な接触機会において有効であるとの見方とはほど遠い現実にあるという所見を示した。Wilkinson は彼女の調査結果を、"言語とホストファミリー神話" の真実として、Frank と彼の学生の所見を引用し、Frank の学生が不満と孤独に取り囲まれていたことに繰り返し言及し報告している。

これまでイマージョン教育としての HS 経験は、言語的環境や学習効果の上で絶対的に効果があると見做されてきた。しかし、以上のような否定的な調査結果により、これまでに検証された量的、質的な研究に比べるとほんのわずかではあるものの、HS 効果に対する反論となって、今後の留学の第二言語習得の課題となっている。

2.3 留学生の異文化適応

Brislin (1981) によると、異文化適応とは、異文化環境において日々の活動が順調に展開でき、ホストから受容されているという感覚と心理的満足感を持つことであると言う。

Furnham ら (1986) は、異文化滞在には旅行、移民、難民、留学、企業派遣、布教、軍隊駐留、大使、国際結婚などの形態があり、形態によって異文化適応の課題や心理的負担が異なり、留学生の場合は、滞在期間が中期で自由意志による渡航者であり、帰国が予定されているという特徴がある (Ward & Kennedy, 1994) と述べている。Bochner (1972) は、留学生の異文化適応の課題は、①若者としての人生における成長、②学生としての学

業の達成、③異文化に適応したり母国文化を伝えたりする文化的課題、の3つがあると指摘した。横林（2002）は、青年期後期の人格発達期に属する大学生の留学は、母文化とは異なる滞在文化での適応課題とともに、人間的成長や自己形成の課題も持っており、異文化での体験は留学生に「複眼的思考の啓発」（江淵, 1991：27）を促し、「異なることへの寛容性」「異なる他者を受け容れること」を可能にし、必要なときに適切な支援が得られなければ、これらのトランスは喪失もされうると指摘した（横林, 2002：35）。さらに、トランスの獲得あるいは喪失の転機としては、ソーシャル・サポート（社会的な支援）の人間関係が一つの重要な「きっかけ」になっていると指摘した（同上：36）。

Ward, et al. (1994) は、異文化適応に含まれる社会文化的適応の側面は、ホストとの良質な接触によって促進され、ホスト文化に近づくほど果たされ、異文化性摂取の度合いに依存し、対人関係形成がソーシャル・サポートを提供して、ストレス対処のサイクルをまわしやすくすると述べている。田中（1998：146）は、ホストとの交流は、異文化性を取り入れる最適の方法であり、ホスト社会でのホストからの行動モデルの提供は、ソーシャル・スキル（社会的技能）獲得を促し、対人関係形成を進める要因ともなると指摘した。Adelman（1988）は、異文化でうまく適応する人を選ぶには、適切なサポートを獲得できる人を選ぶべきだと述べている。ホストからどれほどのサポートを得られるかは、社会的なコミュニケーションの有能性がどの程度かによって予想できるため、行動の査定によりそれを知ることができるという。

2.4 異文化適応のためのソーシャル・サポート・ネットワークとしてのHSの役割

岩男&萩原（1988：81）では、「留学生の適応を促進するうえでホストファミリーのもつ意義がよく指摘されるが、日本人家族と一緒に生活した経験のある者は調査留学生の中に半数おり、そのうちの七割近くが現在もその家族の人たちと接触がある」と答え、HSで得る対人関係の貴重さを述べている。

HSを運営するホストファミリーの視点からの研究はこれまで見過ごされてきた傾向があるが、この不十分さを補うために、前述のKnight & Schmidt-Rinehart（2002）では、24のホストファミリーに対して、家庭環境についての質問調査を行っている。この調査の結果によると、ホストファミリーはHS経験を留学にとって非常に重要な要素であるとみなし、学生のために安全で暖かく支援的な環境を提供することが重要であると報告している。この論文では学生、プログラム運営者そしてネイティブのホストファミリーが、いかにして、HS経験を良いものにするために共に協力していけるかについて、多様で助言的な行為を提示しまとめている。

日本に住んだ留学生をHSの中で考察した研究では、手塚（1991）、山本（1996）があり、そのいずれもが、ホストファミリーの視点からHSでの異文化間コミュニケーション問題を取り上げている。一方、藤野・田中（2006）では、留学生とホストファミリーの視点か

ら HS での相互理解と対人関係のためのソーシャルスキルを分類し、家族的関係を基盤にした HS 場面での有用なスキルについて考察している。Fontaine (1986) は、異文化でのサポートの役割は、ストレスの緩和のみならず、異文化での課題に対する有効な対処が含まれると指摘した。Coehlo, Yuan and Ahmed (1980) は、サポートの需要者と供給者が相互的で親しい関係を築くことが、異文化における良質の体験と個人の成長を促す上で重要であると述べている。

小澤 (2001: 32) によれば、佐藤 (1999) は、「異文化間コミュニケーション」の先行研究を展望したうえで、「異文化間コミュニケーションは、自分の文化的枠組みを相対化し、異なった文化をもつ人との『共同作業』により、新しい関係性を構築する作業」だと述べ、その対処方法として、異文化間トランスが異文化間コミュニケーション場面における文化的な差異やコミュニケーションの方法の差異によって生じる葛藤を解決するために必要であると指摘している。

以上のように、異文化接触と異文化理解、そして異文化間コミュニケーションの上で、HS がソーシャル・サポート・ネットワークの一環として価値ある形態と位置づけられる中で、田中 (2000: 42) は、ソーシャル・サポート・ネットワークの役割について、ネットワークのメンバーの評定を総合して因子分析を行い、その役割を主として「学業サポート」と「生活サポート」の2因子と見出した。「学業サポート」には、「日本語」「日本文化」「勉強」の項目が含まれ、「生活サポート」にはその他の「相談」「楽しむ」「物」「情報」といった項目が含まれた。

3. 本研究の目的 (リサーチクエスチョン)

留学生の異文化適応を促すために、上述の先行研究から見えてくるのは、留学生活における HS という滞在形態の適否と意義である。本論では、実際に HS をしている留学生の視点からの評価を得るために、留学生への調査⁽³⁾を行い、HS 体験をどう評価しているかを、留学生の自己評定から、満足度と有益性、及び前期から後期に及ぶ評価の変化を分析し考察することを目的とした。以上の研究目的により、本研究のリサーチクエスチョン(以下、RQ と記す)を以下の三つとした。

- RQ1.** 留学生は HS の経験にどれくらい満足し、有益だと評価しているのか、そしてどれくらい不満で、有益でないと評価しているのか。
- RQ2.** 留学生は HS でどのようなサポートを受けたとき、それを肯定的で有益な「正の評価」の項目であるとし、また否定的で有益でない「負の評価」の項目とするのか。
- RQ3.** 留学生の HS のサポートについての評価は、前期から後期に及んでどのように変化するのか。

4. 調査・分析の方法

4.1 参加者

参加者は2008年9月から2009年5月までの9ヶ月間と2009年9月から2010年5月までの9ヶ月間に、関西の中規模私立K大学に、短期プログラムの留学生及び交換留学生として滞在し、HSをした2年間に及ぶ留学生、計72名である。また、同じ期間の2年間に、寮⁽⁴⁾に滞在した留学生、計17名である。

HS滞在者と寮の滞在者は、留学生の海外での滞在形態についての評価を比較する上で、対照事例となると考えられる。しかし、寮の人数が、HSの学生72名に対して17名と少数であるので、本論ではあくまでも参考としてのみ、寮の事例を記す。今回のHSについての質問紙調査にあたり、参考事例として、同じ質問を寮の滞在者17名にも並行して行った。

HS留学生の国籍別（表1）、性別（表2）（ $n = 72$ ）と、寮に滞在の留学生の国籍別（表3）、性別（表4）（ $n = 17$ ）は以下のとおりである。

表1 HSの留学生の国籍別

国籍	人数	パーセント
アメリカ	52	72.2
イギリス	6	8.3
フランス	4	5.6
韓国	3	4.2
カナダ	3	4.2
ドイツ	2	2.8
台湾	1	1.4
ハンガリー	1	1.4
合計	72	100.0

表2 HSの留学生の性別

性別	人数	パーセント
男	44	61.1
女	28	38.9
合計	72	100.0

表3 HSの留学生の年令別

年令	人数	パーセント
20才以下	5	6.9
20～21才	44	61.1
22～24才	20	27.8
25～27才	3	4.2
合計	72	100.0

表4 寮の留学生の国籍別

国籍	人数	パーセント
フランス	9	52.9
イギリス	3	17.6
アメリカ	2	11.8
カナダ	2	11.8
ドイツ	1	5.9
合計	17	100.0

表5 寮の留学生の性別

性別	人数	パーセント
男	12	70.6
女	5	29.4
合計	17	100.0

表6 寮の留学生の年令別

年令	人数	パーセント
20才以下	1	5.9
20～21才	2	11.8
22～24才	10	58.8
25～27才	3	17.6
28～30才	1	5.9
合計	17	100.0

4.2 調査の項目・方法・手順、および分析方法

本調査が対象とする留学プログラムは毎年9月初旬に開講し12月末までの4ヶ月間を前期（秋学期）とし、1月から5月末までの5か月間を後期（春学期）とする約9ヶ月に及ぶ留学プログラムである。本調査は、2008-09⁽⁶⁾年度の12月（来日4か月目の前期末）と2009年5月初め（来日9か月目の後期末）の年2回、また同様にして、2009-10年度の12月（来日4か月目の前期末）と2010年5月初め（来日9か月目の後期末）の年2回、計4回にわたって同一の質問紙により、半構造的質問と記述式質問の2形式で調査を実施した。

本調査で分析の対象としたのは以下の設問項目である。分析設問の最初は、(1)「現時点(=調査時点)でHSをしているか、寮に滞在しているか」という質問であり、次いで、(2)HSと寮への満足度を調査するために、「HS又は寮の経験について、どう評価しているか。HS又は寮の経験に満足したか。」という質問を行い、「大変満足している」から「全然満足していない」の5段階で、回答を各学期別に求めた。回答の結果を、2年間を通じて前期と後期を別々に集計し、学期による変化を分析の対象とした。

次に(3)「HSまたは寮の滞在経験において最も有益で肯定的だった点や満足した点は何か」の質問を行い、この質問には自由形式で各学期ごとに計4回にわたり回答を記述してもらった。最後に(4)「HSまたは寮の滞在経験において最も否定的で困難だった点は何か」という質問を行い、これも自由形式で各学期ごとに計4回にわたり回答を記述してもらった。

質問と回答における使用言語は英語であり、本論で紹介している回答事例の日本語は、英語からの翻訳である。翻訳に際してはまず本論の執筆者が英語から日本語に翻訳し、その翻訳を英語教員2名により確認してもらった手順で行った。また、英語圏からではない留学生の1名が日本語により回答を行った。

分析の方法については、上記の質問項目の(1)と(2)を、SPSS 17を用いて、2年間を通じて前期と後期の満足度を別々に集計し、さらに年間別の満足度の記述統計量を調べた。また、(3)と(4)の質問については、記述内容の全てを対象に内容分析(=メッセージ分析)により自由記述から項目を抽出し、それを分類しコーディングを行った後に、どの類似カテゴリーに属するかを整理し決定するという手順により、最終的にいくつかのカテゴリーに分類した。また、2年間を通じての内容分析の結果を、前期と後期を別々に集計し、学期による推移を分析の対象とした。

以上の調査にあたっては、調査を開始する前に、参加者全員に調査の趣旨を説明し、Questionnaire Consent Formにより、調査参加に合意する意志を確認し、倫理的な配慮を行った。

5. 分析の結果

調査紙の(1)「現時点(=調査時点)でHSをしているか、寮に滞在しているか」という質問についての回答として、2年間を通じて、全留学生89名の内72名がHSと回答し、17名が寮に滞在していると回答した。

5.1 RQ1：HS に対する満足度

以下は、RQ1についての分析結果である。

RQ1. 留学生はHSの経験にどれくらい満足し有益だと評価しているのか、そしてどれくらい不満で有益でないと評価しているのか。

次表7は、HSの満足度について、A. 前期、B. 後期、C. 年間の満足度（＝前期と後期の満足度の平均）の記述統計量を示したものである。この記述統計量は、満足度について、「大変満足している」から「全然満足していない」を5段階で提示し、それを5点～1点の値で得点化した。その結果、平均値は、A. 前期が4.380、B. 後期が4.390、C. 年間の満足度が4.385となった。前期と後期のHSについての満足度にはほとんど差がなく、どちらの学期においても、留学生は4.38以上の水準で、HSの経験に対して満足感を持っているという結果が出た。

表7 HSの満足度（A. 前期、B. 後期、C. 年間＝前期と後期の平均）

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
A. 前期のホームステイの満足度	72	1	5	4.38	.985
B. 後期のホームステイの満足度	72	1	5	4.39	.987
C. 年間のホームステイの満足度	72	1	5	4.385	0.914

一方、寮の経験の満足度についても、HSと同様に、5件法で1～5点の得点化により調査した。その結果、以下の表8の「寮の満足度」の記述統計量により、平均値は、A. 前期が3.880、B. 後期が3.470、C. 年間の満足度が3.676となり、寮の場合は、後期の満足度の平均値が前期より0.41低くなった。HSの前期と後期の満足度の差0.01に比べると、寮に対する満足度の違いは後期には0.41減じ、年間においても寮の満足度の平均値3.676は、HSの満足度の平均値4.385に比べて0.709低く、寮の満足度の方がHSの満足度より全体的に低かった。

表8 寮の満足度（A. 前期、B. 後期、C. 年間）

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
A. 前期の寮の満足度	17	3	5	3.88	.781
B. 後期の寮の満足度	17	2	5	3.47	1.007
C. 年間の寮の満足度	17	2.5	5.0	3.676	.7894

HSと寮の満足度を、前期と後期に分けて棒グラフで表わすと、下の図1のようになった。どちらの学期においても、HSの満足度の方が寮の満足度より高いことが認められた。またHSの満足度については、前期と後期において、満足度にほとんど差がなかった。一方、寮については、前期と後期では満足度に差が見られ、来日後の4ヶ月以降の後期には、寮の満足度が0.41減少していた。

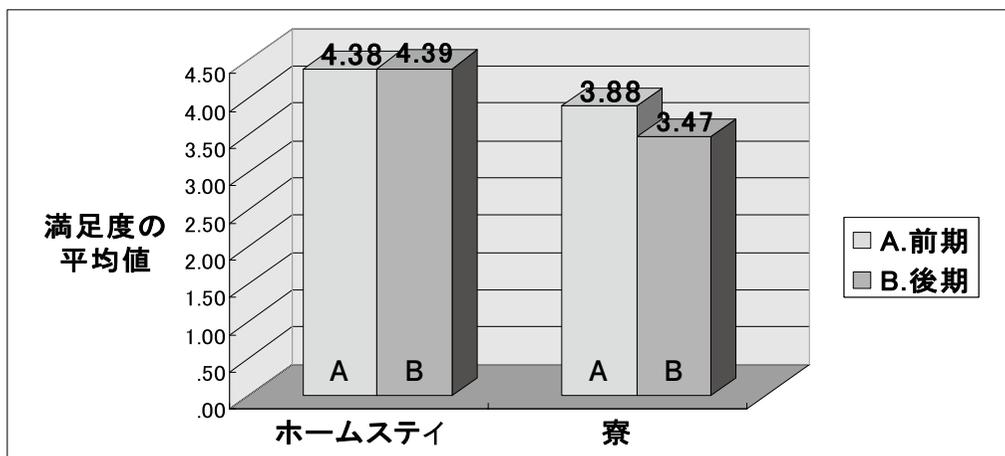


図1 (前期と後期の) HS と寮の満足度の比較

また、HSの満足度について、前期と後期及び年間の満足度の「大変満足だ」～「全然(満足ではない)」の5段階による回答の分布を調査した結果、表9のような分布結果となった。

表9 HSの満足度の分布

	A. 前期		B. 後期		C. 前期と後期の平均	
	人数	パーセント	人数	パーセント	人数	パーセント
大変満足	44	61.1	45	62.5	44.5	61.8
まあ満足	18	25.0	17	23.6	17.5	24.3
ふつう	5	6.9	5	6.9	5	6.9
やや不満	3	4.2	3	4.2	3	4.2
全然	2	2.8	2	2.8	2	2.8
合計	72	100.0	72	100.0	72	100

同様に、寮の満足度について、5段階による A. 前期、B. 後期、C. 年間の満足度についての回答の分布も調べた。結果は、表10のようになった。

表10 寮の満足度の分布

	A. 前期		B. 後期		C. 前期と後期の平均	
	人数	パーセント	人数	パーセント	人数	パーセント
大変満足	4	23.5	2	11.8	3.5	17.65
まあ満足	7	41.2	8	47.1	7.5	44.15
ふつう	6	35.3	3	17.6	4.5	26.45
やや不満	0	.0	4	23.5	0	11.75
全然	0	.0	0	.0	0	0
合計	17	100.0	17	100.0	15.5	100

HS と寮の満足度の年間の満足度についての回答の分布を円グラフで示すと図2と図3のようになった。HS の満足度について、「大変満足」(62%) の占める割合が大きく、「まあ満足」(24%) の部分も「満足している」の分布領域に入れると、86%が「満足だ」という結果になった。

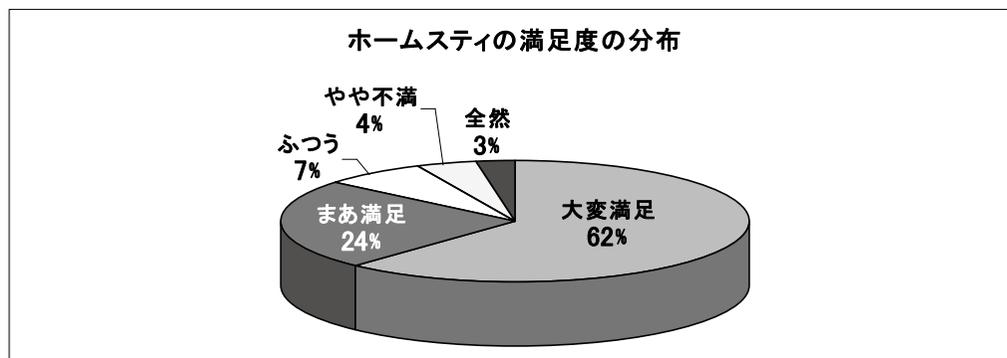


図2 HS の満足度 (年間) について5段階の分布 (円グラフ)

HS について、満足していなかった割合は、「やや不満だ」の4%、「全然満足ではない」の3%を合わせて7%であり、調査参加者の全人数72人の内の5人程度がHS に「不満であった」という結果であった。

一方、寮の満足度については、「まあ満足」(48%) の占める割合が「大変満足」(23%) の2倍以上であった。「大変満足」と「まあ満足」を合わせた割合を「満足している」の分布領域に入れても、その合計は71%に留まった。寮については、「やや不満」が0%、「全然満足ではない」が0%であった。

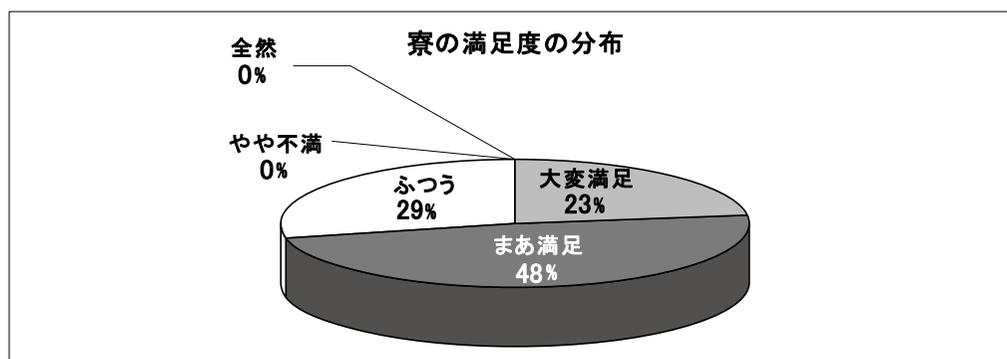


図3 寮の満足度 (年間) についての5段階の分布 (円グラフ)

次に、HS と寮の年間の満足度の平均には意味のある相違があるかどうかを検定するために、 t 検定を行った。2つの平均値間が独立であるために、対応のない t 検定を行ったところ、HS と寮の平均値はそれぞれ4.306と3.678であった。 F 値は.023、有意確率は.880で

有意ではなく、等分散が仮定された。検定の結果から、 $t(87) = 2.64, p = .01 (p < .05)$ となり、HS の満足度の年間平均値が寮の満足度より有意に高いと言える結果となった。

5.2 RQ2：HS のサポートについて、「正の評価」項目と「負の評価」項目

次に RQ2 の結果について以下に述べる。

RQ2. 留学生はどのようなサポートを受けたとき、それを肯定的で有益な「正の評価」であるとし、また否定的で有益でない「負の評価」とするのか。

5.2.1 (A) RQ2：HS の「正の評価」の下位項目

本論の4.2に記した調査の項目・方法・手順にしたがって、RQ2に関する(3)「HS または寮の滞在経験において最も肯定的だった点や満足した点は何か」と(4)「HS または寮の滞在経験において最も否定的で困難だった点は何か」という記述式の質問調査を行った結果、(3)のHS については、内容分析により、前期では148、後期では146の項目が抽出された。

(3)の回答項目の全体を、(A)「HS に対する留学生の肯定的で満足した有益な正の評価」(以下、「HS の正の評価」と略す)とカテゴリー化し、以下の7つの下位項目に分類し、それぞれを下記のように命名した。

「HS の正の評価」は、1. 日本語コミュニケーションの練習と上達、2. 暖かい家庭と家族の提供、3. 日本社会で暮らす支援、4. 日本人家族との暮らし経験による学び、5. 日本文化の理解と学習、6. 良い食生活と住居の保障、7. 人間形成と成長の支援、の7つの下位項目に分類された。

次表12は、「HS の正の評価」の下位項目を、前期と後期を別々に、それぞれ「項目を評価する学生の延べ人数」と「(調査参加の)全体の学生数」を順に示し、さらに前者を分子、後者を分母とする「評価者の割合」を記し、最後に年間の「この項目を評価する学生の延べ人数」を基準にして降順で示したものである。

表11 「HSの正の評価」(降順)

項目	前期			後期			年間(前・後期の合計) この項目を評価する学生の延べ人数
	この項目を評価する学生の延べ人数	全体の学生数	評価者の割合	評価する学生の延べ人数	全体の学生数	評価者の割合	
1. 日本語コミュニケーションの練習と上達	43	72	59.7%	42	72	58.3%	85
2. 暖かい家庭と家族の提供	31	72	43.1%	36	72	50.0%	67
3. 日本社会で暮らす支援	23	72	31.9%	18	72	25.0%	41
4. 日本人家族との暮らし経験による学び	17	72	23.6%	15	72	20.8%	32
5. 日本文化の理解と学習	17	72	23.6%	14	72	19.4%	31
6. 良い食生活と住居の保障	14	72	19.4%	12	72	16.7%	26
7. 人間形成と成長の支援	3	72	4.2%	9	72	12.5%	12
合計	148	72		146	72		294

「HSの正の評価」の1番目には、「1. 日本語コミュニケーションの練習と上達」の見出しで示された下位項目があり、前期では59.7%、後期では58.3%の学生がこの項目を評価していた。この項目について、留学生の記述には、例えば、「ホストの両親と日本語を話すのは言語の学習にはとても良い」、「日本語のスキルを使うことができ、日常会話が上達している」、「毎日のHSでの日本語の練習は大きなプラスだった」などの記述があった。

正の評価の2番目は、「2. 暖かい家庭と家族の提供」であり、前期43.1%、後期50.0%の評価であった。この項目についての留学生の記述例には、「ホスト家族の全員といつでも何でも話すことができた」、「ホストファミリーはすばらしかった。やさしくて面白かったし明らかに私の日本語の助けになった。本当に家族の一部のような気がした」とあった。

正の評価の3番目は「3. 日本社会で暮らす支援」であり、前期31.9%、後期25.0%の評価であった。留学生の記述例には、「ホストお母さんは私が日本の生活に適應できるように手伝って気を使ってくれた」、「私の求める時にはいつも、生活に適應できるように役立つ助言をしてくれ、私を支えてくれた」などがあった。

正の評価の4番目は、「4. 日本人家族との暮らし経験による学び」であり、前期23.6%、後期20.8%の評価であった。学生の記述例には、「実際の日本の生活スタイルが経験できた」、「日本人が毎日どのように暮らしているかを経験することができた」などがあった。

正の評価の5番目は、「5. 日本文化の理解と学習」であり、前期では23.6%、後期19.4%の評価であった。留学生の記述例には、「ホストから日本と日本文化について学んだ」「生きた日本文化を生活の中で学ぶことができた」などがあった。

正の評価の6番目は、「6. 良い食生活と住居の保障」であり、前期19.4%、後期16.7%の評価であった。記述例には、「快適な家、食事を提供してくれ、楽しい場であった」「一日に2食の暖かい食事を得た」などがあった。

正の評価の7番目は、「7. 人間形成と成長の支援」であり、前期4.2%、後期2.5%の評価であった。記述例には、「これまで一人で暮らしてきたので、それとは異なる経験ができ成長した」、「HSで自由というものが責任を伴っていることを痛感した」などがあった。

5.2.1 (B) RQ2：HSの「負の評価」の下位項目

上記の5.2.1と同様にして、調査では、(4)「HSまたは寮の滞在経験において最も困難で否定的だった点は何か」という質問を行い、自由記述形式で回答を得た。(4)の質問項目の結果について、記述回答の全てを内容分析法により分析し、前期と後期を別々に集計した。その結果、前期では109、後期では102の項目を抽出し、全体を(B)「HSに対する留学生の否定的で不満であり有益でない負の評価」(以下、「HSの負の評価」と略す)としてカテゴリー化し、以下の1~8の下位項目、1.文化・生活習慣・考え方による違い、2.不十分なコミュニケーション能力による困難、3.自由がなく窮屈だ、4.不便な生活、5.家庭内での孤立、6.食生活の不慣れと遠慮、7.家庭内不和、8.逆カルチャーショックへの心配、に分類し、それぞれを上記のように命名した。

次表12は、「HSの負の評価」の下位項目を前期と後期を別々に、それぞれ「項目を評価する学生の延べ人数」、「(調査参加の)全体の学生数」を順に示し、さらに後者を分母、前者を分子とする「評価者の割合」を記し、最後に「この項目を評価する学生の延べ人数」を基準にして降順で示したものである。

表12 「HSの負の評価」の項目(降順)

項目	前期			後期			年間(前・後期の合計)
	この項目を評価する学生の延べ人数	全体の学生数	評価者の割合	評価する学生の延べ人数	全体の学生数	評価者の割合	この項目を評価する学生の延べ人数
1.文化・生活習慣・考え方による違い	40	72	55.6%	36	72	50.0%	76
2.不十分なコミュニケーション能力	37	72	51.3%	28	72	38.9%	65
3.自由がなく窮屈だ	15	72	20.8%	19	72	26.4%	34
4.不便な生活	8	72	11.1%	9	72	12.5%	17
5.家庭内での孤立感	5	72	6.9%	5	72	6.9%	10
6.食生活の不慣れと遠慮	3	72	4.2%	2	72	2.8%	5
7.家庭内不和	1	72	1.4%	2	72	2.8%	3
8.自国帰国による喪失感	0	72	.0%	1	72	1.40%	1
合計	109	72		102	72		211

HSに対する留学生の「負の評価」の1番目は、「1.文化・生活習慣・考え方による違い」であり、1の項目について、前期では55.6%、後期では50.0%の学生がこの項目を、自分たちがHSをする上で不満であり否定的な負の要素であると評価した。留学生の記述例には、「私が理解できないしまった乗り越えられない文化的な相違があった」「ホストママと自分には、ミスコミュニケーションと時々文化的な違いからくる誤解が明らかにあった」などの記述があった。

負の評価の2番目は、「2.不十分なコミュニケーション能力による困難」であり、前期51.3%、後期38.9%の学生がこの項目をHSに対する負の評価とした。この項目についての留学生の記述例には、「時々、日本語の会話能力の不足からコミュニケーションが難し

くなる」「言語的なバリアがあり、ホストに溶け込むのが難しい」などの記述があった。

負の評価の3番目は、「3.自由がなく窮屈だ」の項目であり、前期20.8%、後期26.4%の評価であった。この項目の記述例には、「行きたいときにいつでも出かけたり帰ったりする自由がない」「決まった時間に帰宅しなければならないというようなライフスタイルで、自由なキャンパスでの生活に比べて、窮屈だ」などの記述があった。

負の評価の4番目は、「4.不便な生活」の項目であり、前期11.1%、後期12.5%の評価であった。この項目の記述例には、「インターネットが自由に使えない」「家から大学までが遠い」などの記述があった。

負の評価の5番目は、「5.家庭内での孤立感」であり、前期6.9%、後期も同様に6.9%の評価であった。この項目の記述例には、「家族の仲間に入れず孤立している」「コミュニケーションがなく寂しい」などの記述があった。

負の評価の6番目は、「6.食生活の不慣れと遠慮」であり、前期4.2%、後期2.8%の評価であった。この項目の記述例には、「日本食に慣れることができない」「食事の量が少なく、もっと欲しいが遠慮している」などの記述があった。

負の評価の7番目は、「7.家庭内不和」であり、前期1.42%、後期2.8%の評価であった。この項目の記述例には、「家庭内に常に家族同士の諍いがあった」「親子の言い争いが絶えなかった」などの記述があった。

負の評価の8番目は、「8.逆カルチャーショックへの心配」という項目の評価であり、前期では0%であったのが、後期には1.4%の評価となった。しかし、この評価は、記述例「HSがあまりに居心地が良かったので、自国に帰国した時の喪失感が大きい」が示すように、言わば逆カルチャーショックに対する不安からのHSに対する負の評価であった。

5.3 (A) RQ3 : HS の「正の評価」の、前期と後期の割合の比較と変化

次に RQ3 の内容とその結果を示す。

RQ3. 留学生の HS のサポートについての評価は、前期から後期に及んでどのように変化するのか。

「HS の正の評価」のサポートについて、各下位項目の前期から後期の変化を見るために、評価の割合を比較してみた。留学生の HS に対する正の評価の割合の高い順の1番目、「1.日本語コミュニケーションの練習と上達」では前期では59.7%、後期では58.3%を占めており、前期から後期にかけて、1.4%の評価の減少があった。正の評価の2番目は、「2.暖かい家庭と家族の提供」についてであり、前期では43.1%、後期では50.0%の学生がこの項目を評価していた。前期から後期にかけて、この項目の評価は6.9%の上昇を伴って変化した。正の評価の3番目は「3.日本社会で暮らす支援」であり、前期31.9%、後期25.0%の評価となり、後期には6.9%の減少があった。「3.日本社会で暮らす支援」と上述の2番目の項目「2.暖かい家庭と家族の提供」とは、前者が後期には6.9%減少し、後者が後期

には6.9%増加するという正反対の数値の変化を見せた。正の評価の4番目は、「4. 日本人家族との暮らし経験による学び」であり、前期23.6%、後期20.8%の評価となり、後期には2.8%の評価の減少があった。正の評価の5番目は「5. 日本文化の理解と学習」であり、前期23.6%、後期19.4%の評価から、後期には4.2%の減少があった。正の評価の6番目は、「6. 良い食生活と住居の保障」であり、前期19.4%、後期16.7%の評価から、後期には2.7%の減少があった。正の評価の7番目は、「7. 人間形成と成長の支援」であり、前期4.2%、後期12.5%の評価から、後期には8.3%の上昇があった。

前期から後期に上昇を示したのは、「2. 暖かい家庭と家族の提供」と「7. 人間形成と成長の支援」の2項目であり、他の5項目は評価が減少した。

留学生のHSに対する肯定的で有益な「正の評価」の下位項目について、前期と後期の割合の比較と変化を、折れ線グラフで表したのが図4である。縦軸はHSの各下位項目についての正の評価の割合であり、横軸は項目を示している。

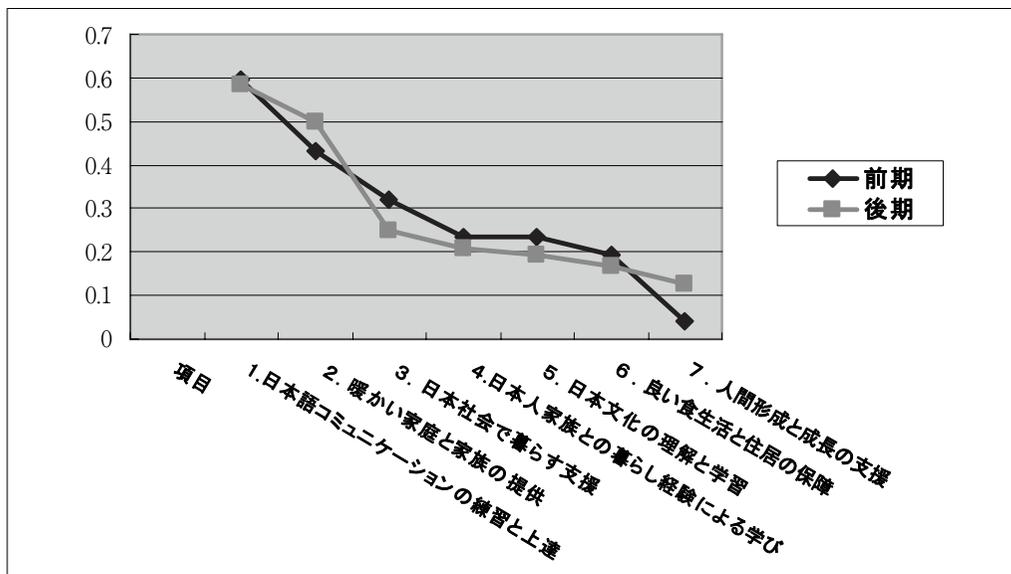


図4 「HSの正の評価」について、前期と後期の比較（折れ線グラフ）

図4から、後期には、「2. 暖かい家庭と家族の提供」と「7. 人間形成と成長の支援」が上昇し、反対に、「3. 日本社会で暮らす支援」、「4. 日本人家族との暮らし経験による学び」、「5. 日本文化の理解と学習」などが減少したことが認められる。

5.3 (B) RQ3 : HSの「負の評価」の、前期と後期の割合の比較と変化

「HSの負の評価」のサポートについて、各下位項目の前期から後期の変化を見るために、評価の割合を比較してみた。留学生のHSに対する負の評価の1番目、「1. 文化・生活習慣・考え方による違い」は前期55.6%、後期50.0%で、後期には5.6%の評価の減少があ

った。負の評価の2番目は「2. 不十分なコミュニケーション能力による困難」であり、前期51.3%、後期38.9%で後期には12.4%の減少であった。負の評価の3番目は「3. 自由がなく窮屈だ」であり、前期20.8%、後期26.4%で後期には5.6%の上昇の変化があった。負の評価の4番目は「4. 不便な生活」であり前期11.1%、後期12.5%で、後期には1.4%の上昇であった。負の評価の5番目は「5. 家庭内での孤立感」であり、前期と後期共に6.9%の評価であり変化がなかった。負の評価の6番目は「6. 食生活の不慣れと遠慮」であり、前期4.2%、後期2.8%で1.4%の減少があった。負の評価の7番目は「7. 家庭内不和」であり前期1.4%、後期2.8%で後期には1.4%の上昇があった。負の評価の8番目は、「8. 逆カルチャーショックへの心配」であり、前期0%から後期1.4%へと上昇変化があった。

次図5は、留学生のHSに対する否定的な「負の評価」の下位項目について、前期と後期の割合の比較と変化を、折れ線グラフで示したものである。縦軸はHSの各下位項目についての正の評価の割合であり、横軸は項目を示している。

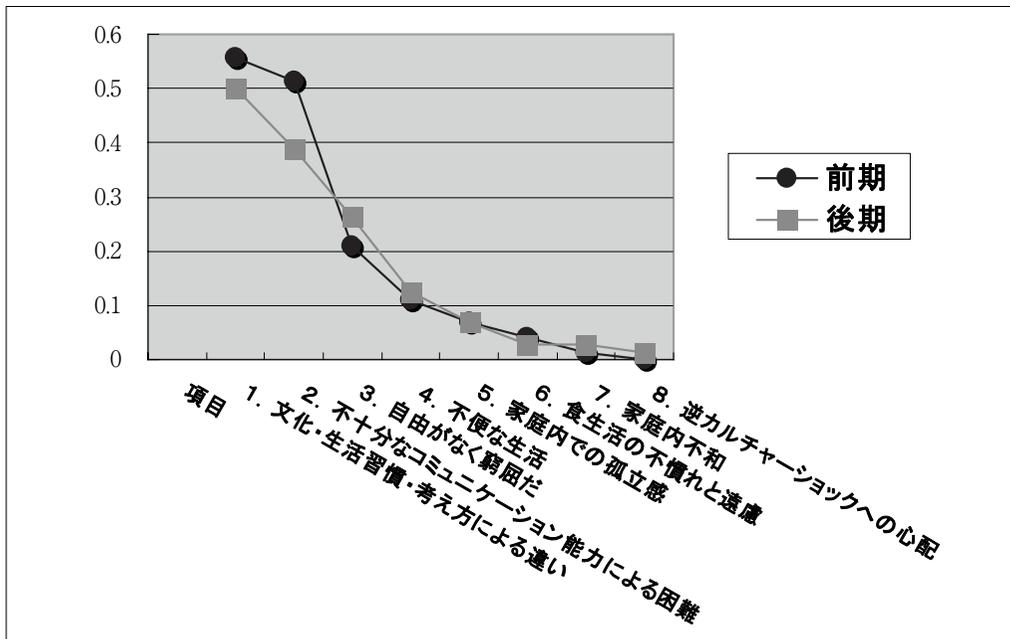


図5 「HSの負の評価」について、前期と後期の比較（折れ線グラフ）

図5から、後期には「2. 不十分なコミュニケーション能力による困難」が目立って減少し、「3. 自由がなく窮屈だ」が上昇したことが認められる。

5.4 (A) HSの「正と負の評価」の下位項目

HSについて有益であるとする肯定的「正の評価」と有益でないとする否定的「負の評価」の下位項目を合わせて一覧した場合、HSはどのような全体像を示すのか。また、前期と後期には、どのような構成項目と順位により、評価の割合が占められるのか。HSに対す

る「正と負の評価」を合一して、「年間（前期・後期の合計）の、各項目を評価する学生の延べ人数」を基準にし、降順により表13に示した。表13では、「正の評価」と「負の評価」であることをそれぞれ「正（+）」「負（-）」の記号で表し、前期と後期別に、「各項目を評価する学生の延べ人数」と「（参加者の）全体数72名」及び「72名に占める評価者の人数の割合（%）」を表示し、表の最後の欄に、前期から後期への評価の変化を、前期を基準に、「前期と後期の評価者の割合（%）の増減の変化」として記し、「増」の場合にはプラスとして無標、「減」の場合にはマイナスとして（-）の有標で示し、前期を基準にした後期への変化を表した。

表13 HS に対する「正と負の評価」の項目（降順）

項目	評価 (正 or 負)	年間（前期・後期の合計） この項目を評価する学生の延べ人数	前期		後期			前期と後期の評価者の割合（%）の増減の変化	
			この項目を評価する学生の延べ人数	全体の学生数	評価者の割合	評価する学生の延べ人数	全体の学生数		評価者の割合
1. 日本語コミュニケーションの練習と上達	正（+）	79	43	72	59.7%	42	72	58.3%	-1.4%
2. 文化・生活習慣・考え方による違い	負（-）	76	40	72	55.6%	36	72	50.0%	-5.6%
3. 暖かい家庭と家族の提供	正（+）	73	31	72	43.1%	36	72	50.0%	6.9%
4. 不十分なコミュニケーション能力による困難	負（-）	65	37	72	51.3%	28	72	38.9%	-12.4%
5. 日本社会で暮らす支援	正（+）	38	23	72	31.9%	18	72	25.0%	-6.9%
6. 日本人家族との暮らし経験による学び	正（+）	35	17	72	23.6%	15	72	20.8%	-2.8%
7. 自由がなく窮屈だ	負（-）	34	15	72	20.8%	19	72	26.4%	5.6%
8. 日本文化の理解と学習	正（+）	29	17	72	23.6%	14	72	19.4%	-4.2%
9. 良い食生活と住居の保障	正（+）	28	14	72	19.4%	12	72	16.7%	-2.8%
10. 不便な生活	負（-）	17	8	72	11.1%	9	72	12.5%	1.4%
11. 人間形成と成長の支援	正（+）	12	3	72	4.2%	9	72	12.5%	8.3%
12. 家庭内での孤立感	負（-）	10	5	72	6.9%	5	72	6.9%	0.0%
13. 食生活の不慣れと遠慮	負（-）	5	3	72	4.2%	2	72	2.8%	-1.4%
14. 家庭内不和	負（-）	3	1	72	1.4%	2	72	2.8%	1.4%
15. 逆カルチャーショックへの心配	負（-）	1	0	72	.0%	1	72	1.40%	1.4%

表13において、年間の「この項目を評価する学生の延べ人数」の多い順から少ない順に、「正の評価」と「負の評価」の項目を合わせて一覧すると、1番目には「正の評価」の「日本語コミュニケーションの練習と上達」、2番目には「負の評価」の「文化・生活習慣・考え方による違い」、以下、3番目には、（正）「暖かい家庭と家族の提供」、4番目には、（負）「不十分なコミュニケーション能力による困難」が続き、4番目までで評価全体の約50%を占めた。上位4位までに、「正」と「負」が交互に現れ、それ以下の順位においても、「正」

「負」の評価が混交していた。以下、5番目以降には、(正)「日本社会で暮らす支援」と「日本人家族と暮らす貴重な経験」が5番目と6番目、次に、(負)「自由がなく窮屈だ」と(正)「日本文化の理解と学習」が7番目と8番目、そして(正)「良い食生活と住居の保障」と(負)「不便な生活」が9番目、10番目と続いた。

5.4(B) HSの「正と負の評価」について、前期と後期の比較

HSの「正と負の評価」の各下位項目について、前期と後期の評価の割合の比較と変化を、各項目別に折れ線グラフで表したのが図6である。縦軸はHSの正と負の評価の下位項目についての評価の割合であり、横軸は項目を示している。

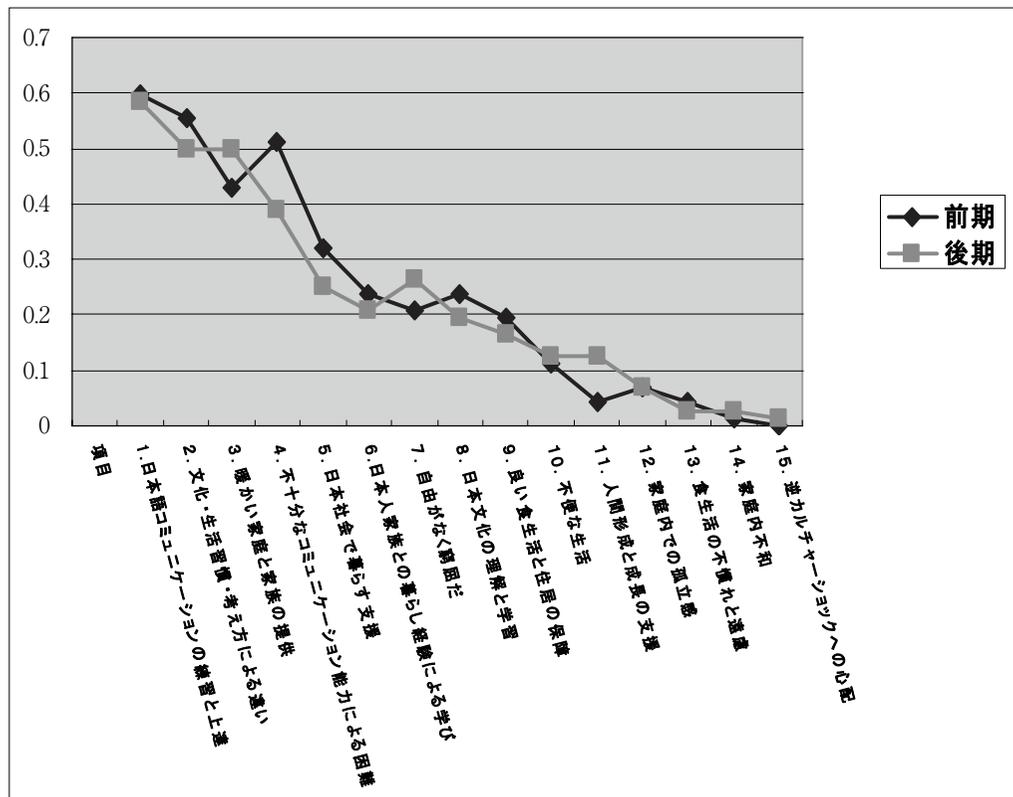


図6 「HSの正負の評価」について、前期と後期の比較 (折れ線グラフ)

上述の表13に示した「HSに対する正と負の評価の項目 (降順)」について、前期と後期の評価者の割合の増減の変化をより明示するために、図7を下記に表示した。図7において、折れ線グラフの上部に突出しているのが、前期から後期にかけて評価の割合が増加した項目の「3. 暖かい家庭と家族の提供」、「7. 自由がなく窮屈だ」、「11. 人間形成と成長の支援」である。また、下部に突出しているのが、前期から後期にかけて評価の割合が減少した項目の「4. 不十分なコミュニケーション能力による困難」、「5. 日本社会で暮らす支

援]、「2.文化・生活習慣・考え方による違い」、「8.日本文化の理解と学習」である。

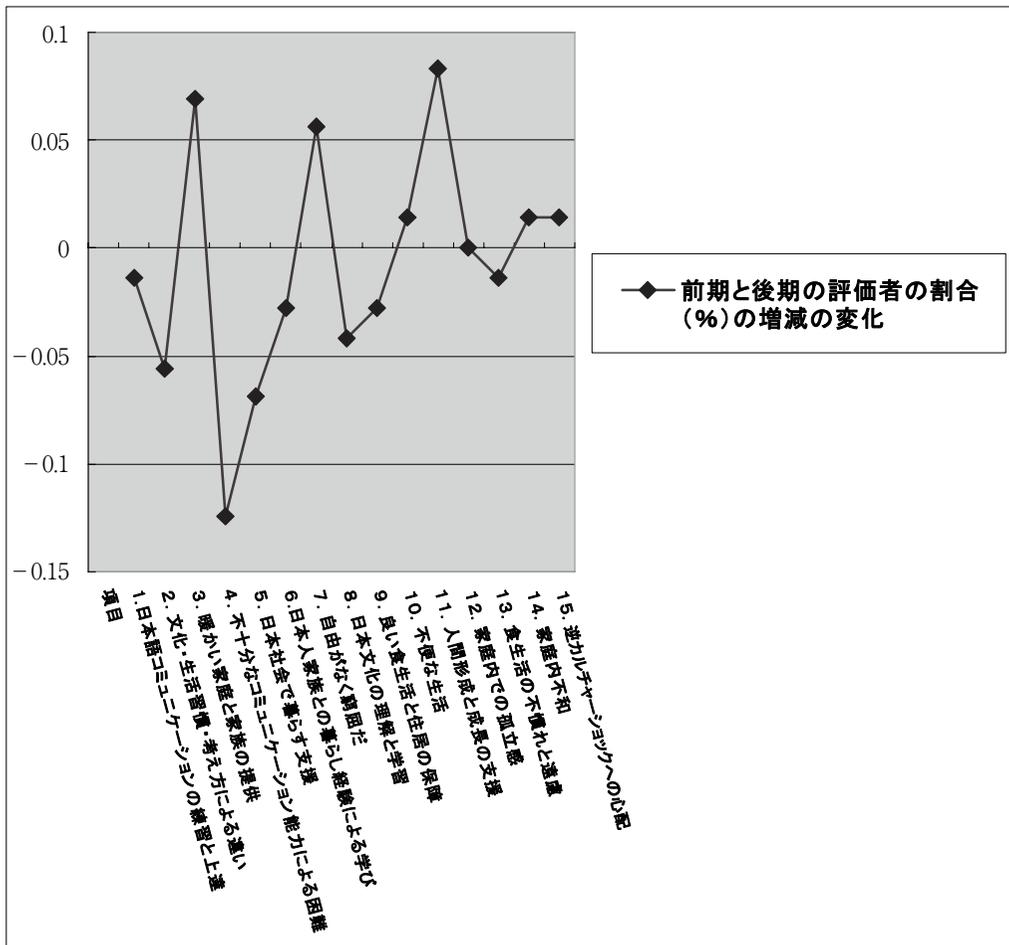


図7 HSの「正と負の評価」について、前期と後期の評価者の割合の増減の変化

5.5 寮の「正の評価」と「負の評価」の下位項目について、及び前期と後期の比較

RQ2. について記述式質問紙調査の質問では、寮に対しても、次の2点、(3)「寮の滞在経験において最も肯定的だった点や満足した点は何か」と、(4)「寮の滞在経験において最も困難だった点は何か」について質問した。ここでは、HS に対する対照比較の参考例として、寮についての上記の質問 (3) (4) に対する調査結果を以下に概観する。

まず、寮に対する肯定的な「正の評価」の下位項目について、「年間のこの項目を評価する学生の延べ人数」を基準にして、降順により、表14に、「項目」及び、前期と後期別に、「項目を評価する学生の延べ人数」と「評価者の割合」を記した。

表14 寮に対する留学生の「正の評価」の項目（降順）

項目	前期			後期			年間（前・後期の合計） この項目を評価する学生の延べ人数
	この項目を評価する学生の延べ人数	全体の学生数	評価者の割合	評価する学生の延べ人数	全体の学生数	評価者の割合	
1. 自由だ	12	17	70.6%	12	17	70.6%	24
2. プライバシーが守れる	8	17	47.1%	3	17	17.6%	11
3. 寮の管理人の親切さ	5	17	29.4%	5	17	29.4%	10
4. 寮の地域の利便性	5	17	29.4%	4	17	23.5%	9
合計	30	17		24	17		54

寮の「正の評価」の項目について、前期と後期の評価の割合を比較してみると、留学生の寮に対する評価の割合の高い順では、1番目が「1. 自由だ」（前期、後期共に70.6%）で、記述例には、「自由だった。一人で好きなように生活できた」「日本語が上達しないということを除いては、気ままに自由に過ごせた」などがあつた。前期から後期にかけて、この項目に対する評価の割合に変化はなかつた。寮の正の評価の2番目は、「2. プライバシーが守れる」（前期47.1%、後期17.6%）であり、記述例には、「自分以外には誰も部屋におらず、プライバシーを邪魔する者はいなかつた」などがあつた。この項目については、前期から後期にかけて評価割合が29.5%減少するという変化があつた。正の評価の3番目は「3. 寮の管理人が親切だ」（前期、後期共に29.4%）であり、記述例には、「寮で働いている人達は良い人だった」などがあり、前期から後期にかけて、評価の割合に変化はなかつた。正の評価の4番目は、「4. 寮の地域の利便性」（前期29.4%、後期23.5%）であり、記述例には、「寮が繁華街に近かつたので、買い物や遊ぶのに便利だった」などがあつた。前期から後期には評価の割合が5.9%減少するという変化があつた。

留学生の寮に対する「正の評価」の下位項目について、前期と後期の割合の比較と変化を、各項目別に折れ線グラフで表したのが図8である。縦軸は寮の各下位項目についての正の評価の割合、横軸は項目を示している。

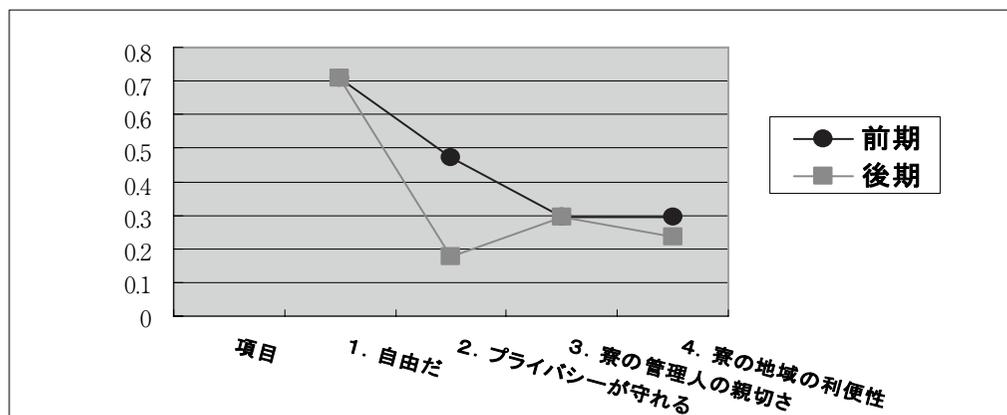


図8 寮の「正の評価」について、前期と後期の比較（折れ線グラフ）

次に、寮に対する「負の評価」の下位項目について、「年間（前・後期の合計）の各項目を評価する学生の延べ人数」を基準にして、降順により次表15に示した。

表15 寮に対する留学生の「負の評価」の項目（降順）

項目	前期			後期			年間（前・後期の合計） この項目を評価する学生の延べ人数
	この項目を評価する学生の延べ人数	全体の学生数	評価者の割合	評価する学生の延べ人数	全体の学生数	評価者の割合	
1. 日曜と祭日には食事が出ない	9	17	52.9%	7	17	41.2%	16
2. 日本語でのコミュニケーションがない	7	17	41.2%	8	17	47.1%	15
3. 食費が高つく	10	17	58.8%	5	17	29.4%	15
4. 通学に不便	7	17	41.2%	5	17	29.4%	12
5. 寮内環境が不良	7	17	41.2%	5	17	29.4%	12
6. 日本家庭での経験ができない	6	17	35.3%	5	17	29.4%	11
7. 日本に関する情報が入らない	3	17	17.6%	5	17	29.4%	8
8. 孤独だ	1	17	5.9%	6	17	35.3%	7
合計	50	17		46	17		96

次に、寮の「負の評価」について、各下位項目の前期と後期の評価の割合を比較してみた。留学生の寮に対する「負の評価」の割合の高い1番目は、「1. 日曜と祭日には食事が出ない」（前期52.9%、後期41.9%）であり、記述例には、「日曜と祭日には食事が出なかった。お金もなかったので、部屋でパンを食べた。」などがあった。しかし、前期から後期にかけてこの評価割合は11%減少した。負の評価の2番目は、「2. 日本語でのコミュニケーションがない」（前期41.2%、後期47.1%）であり、記述例には、「寮に帰宅してからは日本語を使う機会がなかった」、「休みが続くと、日本人の友人と合わない限り、日本にいても日本語で話す必要がなかった」などがあった。前期から後期にかけて、この項目についての評価割合が5.9%増加した。負の評価の3番目は、「3. 食費が高つく」⁽⁷⁾（前期58.8%、後期29.4%）であり、記述例には、「予想していたより食費が高い」、「日本で日本食を味わう経済的な余裕がない」などがあった。しかし、前期から後期にかけて、この項目の評価割合は29.9%減少した。以下、4番目には、「4. 通学に不便」があり、記述例には「キャンパスまでが遠い」、「自国にいた時と比べて通学時間がかかり過ぎる」などがあった。5番目には、「5. 寮内環境が不全」があり、記述例には「シャワーの順番を取るのに朝早く起きなければならない」、「洗濯機の数足りない」などがあった。上述の4番目と5番目は、共に、前期41.2%、後期29.4%であり、前期から後期にかけて、この2項目についての評価割合は共に11.8%減少した。負の評価の6番目は「6. 日本家庭での経験ができない」（前期35.3%、後期29.4%）であり、記述例には、「せっかく日本に来たのに、寮では自国の生活内容と変わらず、（日本で）HSをしている学生の経験と大きな差がある」などがあった。しかし、この項目の割合は前期から後期にかけて5.9%の減少であった。7番目が「7. 日本に関する情報が入らない」（前期17.6%、後期29.4%）であり、記述例には、「日本人と話

す機会が少ないので、日本のことを知らない」などがあり、この項目の割合は後期にかけて、11.8%の増加であった。8番目が「8. 孤独だ」（前期5.9%、後期35.3%）であり、記述例には、「寮ではいつも一人だ」「寮では、自分の国にいた時と何も変化がなく、外国にいて孤独を感じている」などがあり、29.4%の増加であった。

留学生の寮に対する「負の評価」の下位項目について、前期と後期の割合の比較と変化を、各項目別に折れ線グラフで表したのが図9である。縦軸は寮の各下位項目についての負の評価の割合であり、横軸は項目を示している。

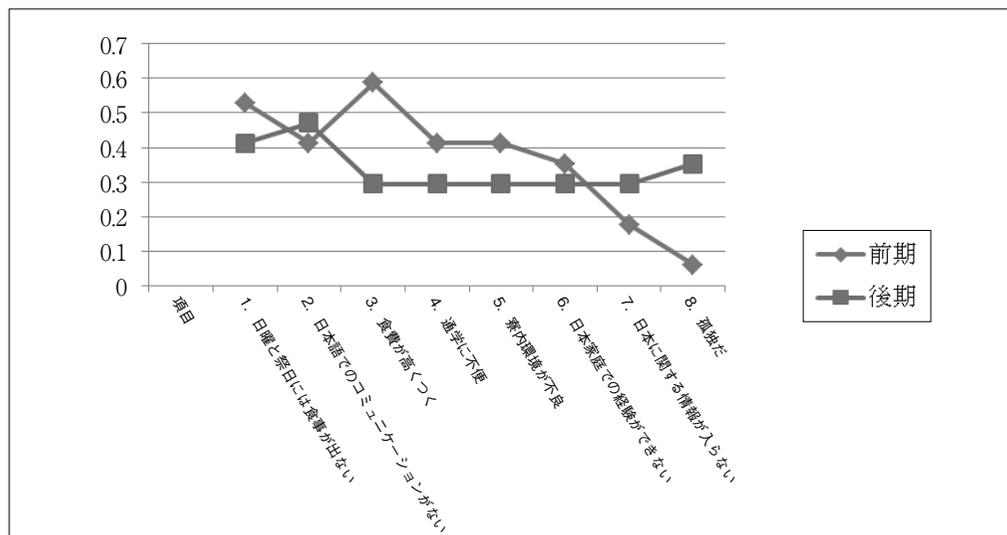


図9 寮の「負の評価」について、前期と後期の比較（折れ線グラフ）

寮について肯定的で有益な「正の評価」と、否定的で有益でない「負の評価」の下位項目を合わせて一覧した時、寮滞在はどのような全体像を示すのか。また、前期と後期には、どのような構成項目と順位により、評価の割合が占められているのか。寮に対する「正負の評価」を合一して、「年間（前期・後期の合計）の、この項目を評価する学生の延べ人数」を基準にし降順により、前期と後期の学期別に、各項目を評価する学生の延べ人数と、全体数17名に占める評価者の人数の割合を示したのが表16である。表16には「正の評価」と「負の評価」であることをそれぞれ「正（+）」「負（-）」の記号で表した。また、表の最後の欄に、前期と後期の評価割合を比較して、「前期と後期の評価者の割合（%）の増減」を表示した。

表16 寮に対する「正と負の評価」の項目（降順）

項目	評価 (正or負)	年間（前期・後期の合計）		前期		後期		前期と後期の評価者の割合(%)の増減の変化	
		この項目を評価する学生の延べ人数	この項目を評価する学生の延べ人数	全体の学生数	評価者の割合	全体の学生数	評価者の割合		
1.自由だ	正(+)	19	12	17	70.6%	7	17	70.6%	0.0%
2.日曜と祭日には食事が出ない	負(-)	16	9	17	52.9%	7	17	41.2%	-11.7%
3.日本語でのコミュニケーションがない	負(-)	15	7	17	41.2%	8	17	47.1%	5.9%
4.食費が高つく	負(-)	15	10	17	58.8%	5	17	29.4%	29.4%
5.通学に不便	負(-)	12	7	17	41.2%	5	17	29.4%	11.8%
6.寮内環境が不全	負(-)	12	7	17	41.2%	5	17	29.4%	-12.3%
7.日本家庭での経験ができない	負(-)	11	6	17	35.3%	5	17	29.4%	-5.9%
7.寮の管理人の親切さ	正(+)	10	5	17	29.4%	5	17	29.4%	0.0%
8.プライバシーが守れる	正(+)	11	8	17	47.1%	3	17	17.6%	29.5%
9.寮の地域の利便性	正(+)	9	5	17	29.4%	4	17	23.5%	-5.9%
10.日本に関する情報が入らない	負(-)	8	3	17	17.6%	5	17	29.4%	11.8%
11.孤独だ	負(-)	7	1	17	5.9%	6	17	35.3%	29.4%

寮の「正と負の評価」の各下位項目について、前期と後期の評価の割合の比較と変化を、折れ線グラフで表したのが図10である。

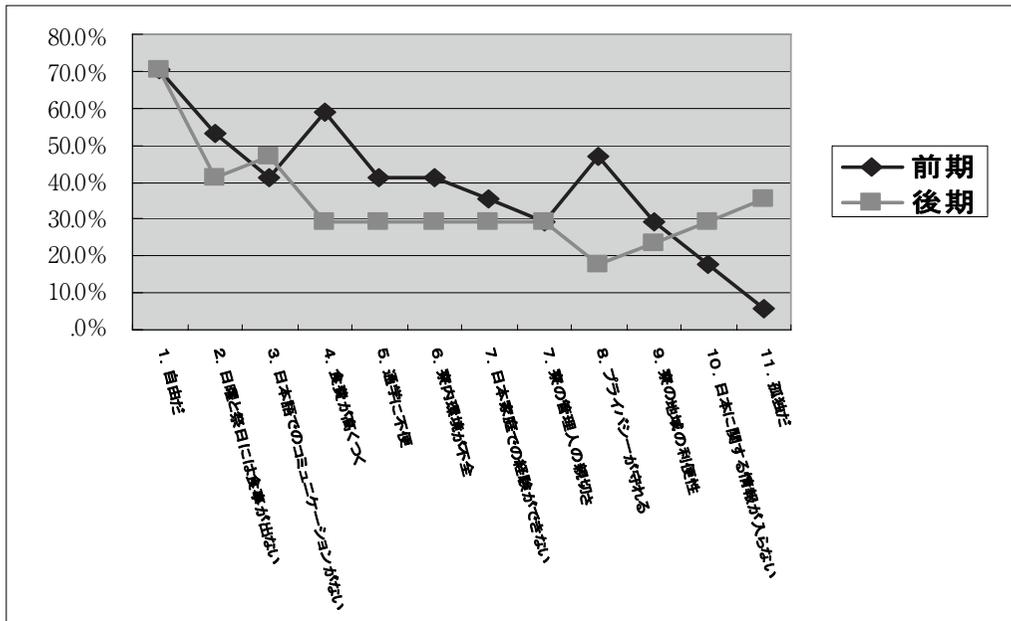


図10 寮の「正負の評価」について、前期と後期の比較（折れ線グラフ）

上述の表16に示した「寮に対する『正と負の評価』の項目（降順）」について、前期と

後期の評価者の割合の増減の変化をより明示するために、図11を下記に表示した。

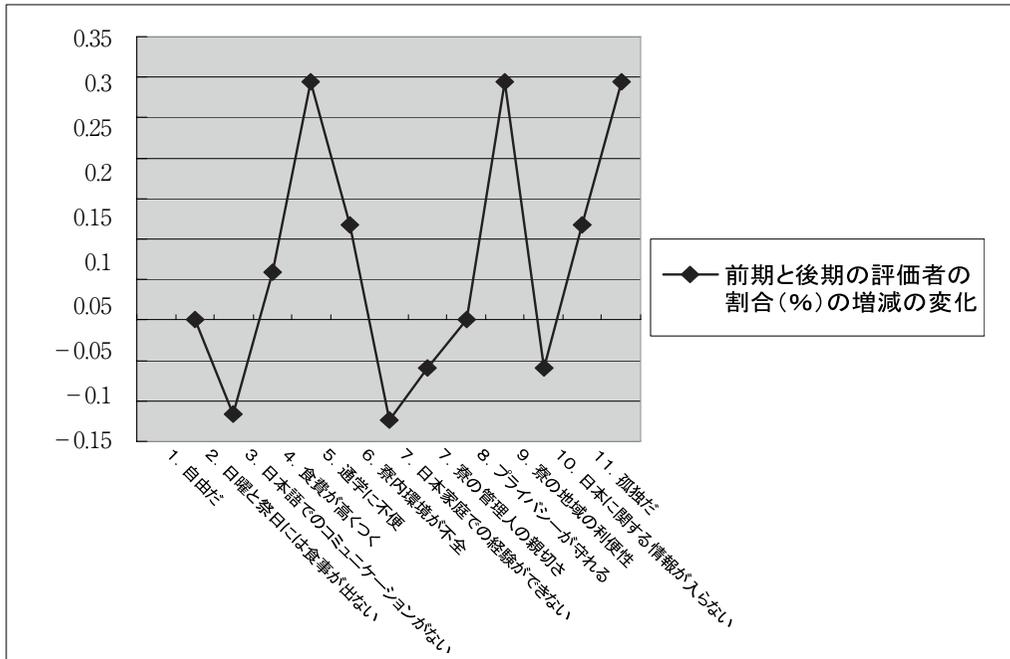


図11 寮の「正と負の評価」について、前期と後期の評価者の割合の増減の変化

図11において、折れ線グラフの上部に突出しているのが、後期に評価の割合が増加した「4.食費が高くつく」「2.プライバシーが守れる」「11.孤独だ」「5.通学に不便」「10.日本に関する情報が入らない」である。また下部に突出しているのが後期に評価の割合が減少した「2.日曜と祭日には食事が出ない」「6.寮内環境が不全」と「7.日本家庭での経験ができない」、「9.寮の地域の利便性」である。

6. 考察

分析の結果を以下の4つに分けて考察する。

第1に、RQ1.の「留学生はHSの経験にどれくらい満足し、有益だと評価しているのか、そしてどれくらい不満で、有益でないと評価しているのか」について、下の表17「HSと寮の満足度の平均値」の結果に見られるように、HSの満足度は、前期と後期が共に最小値1～最大値5の範囲内で4.38～4.39の平均値を得ていた。寮の満足度と比較しても、HSの方が前期では寮より0.5、後期では0.92平均値が高く、しかも前期と後期のHSの満足度の平均値にはほとんど差がないことから、HSの経験の満足度が前期と後期共に変わらず

表17 HSと寮の満足度の平均値

	ホームステイ	寮
A. 前期	4.38	3.88
B. 後期	4.39	3.47

に維持されたまま、留学生はその満足度に相当する HS の経験の質的内容を得たものと解釈される。

満足度の分布においても、HS では「大変満足」が62%を占めて、「まあ満足」の24%を含めると、86%の留学生がHSに「満足だ」という結果であった。HSについて、満足していなかった割合は、「やや不満だ」の4%、「全然満足ではない」の3%を合わせて7%という結果であり、留学生がHS経験に年間を通じて満足していたことを示す数字であった。

第2に、HSに対する肯定的で満足した有益な「正の評価」について、「前期と後期の比較」の図4からは、次の①～③の特徴が見出された。

- ①「日本語コミュニケーションの練習と上達」が前期59.7%と後期58.7%で高い割合を占めた
- ②「暖かい家庭と家族の提供」と「人間形成と成長の支援」の割合が、後期になってそれぞれ6.9%、8.3%伸びるという変化を示した
- ③「日本社会で暮らす支援」、「日本人家族との暮らし経験による学び」、「日本文化の理解と学習」、「良い食生活と住居の保障」の割合が後期になってそれぞれ6.9%、2.8%、2.0%、2.7%減少するという変化を示した

上記の①の特徴から、ホストとの日常生活を営む上で、必然的に必要となる日本語コミュニケーションの機会を、留学生が日本語の練習と上達の間であると捉えて評価していることが理解される。また②と③の特徴から、前期から後期にかけて、日本での生活に慣れて日本社会への適応が進むと共に、前期で評価の高かった③の「日本社会で暮らす支援」、「日本人家族との暮らし経験による学び」、「日本文化の理解と学習」などの異文化適応のための学習とも言えるサポートに対する評価が次第に減少し、対照的に、後期には、「暖かい家庭と家族の提供」という穏やかで安定した日常生活への暮らしのサポートに対する評価が伸びたことが注目される。来日当初に比べて日本語能力が伸び、また日本社会への適応のためのソーシャル・スキル（社会生活の技能）の獲得が進んだことにより、前期には有益であると高く認知されていた③の異文化適応のための学習とみなされる項目に対するサポート評価が減少していった過程が認められる。

第3に、HSに対する「負の評価」について、「前期と後期の比較」の図5からは、次の①～③の特徴が見出された。

- ①「不十分なコミュニケーション能力」、「文化・生活習慣・考え方による違い」及び「食生活の不慣れと遠慮」が後期にはそれぞれ12.4%、5.6%、1.4%の割合で減少した
- ②「自由がなく窮屈だ」が後期には5.6%の割合で増加した
- ③「家庭内での孤立感」は前期、後期ともに6.1%と同一の割合を示し、その評価に変化がなかった

留学生のHSには、ホストと共に生活をする上で、ある種の内的矛盾を含む要素が存在する。その要素においてHSとは当初から生活の困難が予想されるものだとも言える。そ

の要素とは、留学生活でのHSが、第1に、国籍・文化・考え方の相違がある者の協同生活であること、第2に、HSの生活では第二言語使用のコミュニケーションが必要なこと、第3に、留学生とホストは任意的な組み合わせであることなどである。上述の要素などが要因となって、対人関係の葛藤や衝突が伴う「負の評価」が現れることは、留学生が異文化の場である日本人家庭にHSする当初からある程度は不可避的なことであり、いわば異文化コミュニケーション、異文化接触、異文化理解の現場では必然的な現象だとも言える。特に、日本語能力の低い学生にあっては、学習途上にある不十分な日本語能力を駆使して、ホスト家族との意志疎通をはからねばならず、根底に「文化・生活習慣・考え方による違い」のあることも交差して、HSにおいて、葛藤や衝突を伴う否定的で「負の評価」となる要因は常に孕まれていると考えられる。この「負の評価」は、共に生活するという性質上、留学生の一方的な評価に留まらず、ホスト家族の方でも同じ評価を持つ可能性は常にある。

しかしながら、上記①の特徴において、「文化・生活習慣・考え方による違い」、「不十分なコミュニケーション能力」、「食生活の不慣れと遠慮」が、前期から後期にかけて、それぞれ5.6%、12.4%、1.4%の割合で減少を示したことは、9ヶ月近いHSの中で、異文化接触が孕む上記3つのような矛盾的要素が多少なりとも乗り越えられたことを示し、留学生は前期から後期のHSの過程で、異文化接触での対人関係の障害を乗り越えていける何らかのソーシャル・スキル（社会生活の技能）を獲得していつていることが示唆される。ここで言うソーシャル・スキルとは、異文化接触における基礎スキル^⑧であるコミュニケーション能力と文化的基盤を含んだ社会生活スキル全般の異文化間ソーシャル・スキルを含むものである。

その一方では、上記②が示すように、「自由がなく窮屈だ」という「負の評価」が後期になって5.6%増加しているという現実には、留学期間が長くなるにつれて、コミュニケーション能力が伸び、異文化適応能力が増した結果、HSに頼らなくとも日本社会で暮らしていける自信がついたことが一つの要因になっていると推察される。同時に、上記③の特徴からは、HSになじめないまま「家庭内での孤立感」を抱いている学生が前期、後期共に6.9%を占め、72人中の5人近くに相当して存在していることが窺われる。

第4に、HSの「正の評価」と「負の評価」を合わせた一覧について、図6の折れ線グラフからは、前期と後期の比較において、次の①～③の特徴が見出された。

- ① 「不十分なコミュニケーション能力による困難」（前期51.3%、後期38.9%）と「人間形成と成長の支援」（前期4.2%、後期12.5%）が後期には特に大きな増減の変化を示し、前者が12.4%減、後者が8.3%の増加となった
- ② 「暖かい家庭と家族の提供」（前期43.1%、後期50.0%）、「自由がなく窮屈だ」（前期20.8%、後期26.4%）、「人間形成と成長の支援」（前期4.2%、後期12.5%）が、後期になって、それぞれ6.9%、5.6%、8.3%の増加を示した
- ③ 「不十分なコミュニケーション能力による困難」（前期51.3%、後期38.9%）、「日本社

会で暮らす支援」(前期31.9%、後期25.0%)、「文化・生活習慣・考え方による違い」(前期55.6%、後期50.0%)、「日本文化の理解と学習」(前期23.6%、後期19.4%)が、後期になって、それぞれ12.4%、6.9%、5.6%、4.2%の減少を示した

上記①～③の結果から、留学生はHSに対して、特に後期には「暖かい家庭と家族の提供」と同時に「自由がなく窮屈」ではないことを同時に求めており、また、HSを「人間形成と成長の支援」の場と評価するように変化してきたことが認められる。前期から後期にかけての③の項目についての評価の減少は、後期にはHSでの暮らしとコミュニケーションがより容易となり、日本社会で暮らすための適応が進み、文化・生活習慣・考え方による対人関係上の困難が多少なりとも乗り越えられるように変化し、日本文化の理解と学習にも慣れて、異文化理解や異文化適応における困難が減少してきたことが窺える。

表13によると、HSにおいては、HSという異文化接触の生活の場が、有益な「正の評価」のみで実践されているわけではなく、「日本語コミュニケーションの練習と上達」及び「暖かい家庭と家族の提供」のような「異文化接触の成果と恩恵」によりもたらされた「正の評価」と、「文化・生活習慣・考え方による違い」及び「不十分なコミュニケーション能力による困難」のような「異文化接触のつまずきと葛藤」による「負の評価」が交錯した形でHSが実践されていることが示唆されている。Yoshikawa (1987) は異文化適応の過程を1) 接触 (contact)、2) 不統合 (disintegration)、3) 再統合 (reintegration)、4) 自律 (autonomy)、5) ダブル・スウィング (double-swing)⁹⁾の5段階にまとめているが、HS生活の中でも、ダブル・スウィングの5段階は、留学生一人一人に現出し、HSは多様な葛藤、危機を各人の状況に応じて引き起こすものの、同時に、それが自己成長と形成のための経験となり、時間の経過と共に留学の目的と課題が果たされていくものと捉えられる。

第5に、上述の第1～第4の考察に見られるように、異文化社会適応の過程において、HSとは、ソーシャル・サポート・ネットワークの大きな一環として、留学生の「正の評価」を積極的に支援することにより、ホスト家族による異文化適応を促す「生活と学業」のソーシャル・サポートの支援的役割を果たしながら、留學生活の価値ある滞在形態としてのHSの環境を提供する役割を担っていると考えられる。その過程において、「負の評価」の存在をホスト家族と留学生は共に意識し、その障害を回避し解決するために、異文化コミュニケーション・異文化接触及び異文化理解のプロセスでの乗り越えるべき方法と課題として、異文化間ソーシャル・スキルを見出し共有していかなければならないと考える。

以下に、参考までに、寮に対する「正と負の評価」についての考察を付記しておく。

第1に、寮に対する「正の評価」について、図8からは、前期と後期の比較において、次の①～③の特徴が見出された。①「自由だ」が前期70.6%、後期70.6%、「寮の管理人が親切だ」が前期29.4%、後期29.4%と、前期と後期の評価が同一であり変化がなかった。②「2. プライバシーが守れる」が前期47.1%、後期17.6%で、前期より後期が29.5%減少した。③「寮の地域の利便性」が前期29.4%、後期23.5%で、前期より後期が5.9%減少した。

第2に、寮の「負の評価」について、図9からは、前期と後期の比較において、次の①～②の特徴が見出された。①「日本語でのコミュニケーションがない」、「日本に関する情報が入らない」、「孤独だ」が後期にそれぞれ5.9%、11.8%、29.4%増加した。②「日曜と祭日には食事が出ない」、「食費が高くつく」、「通学に不便」、「寮内環境が不全」、「日本家庭での経験ができない」が、それぞれ11%、29.9%、11.8%、11.8%、5.9%減少した。

第3に、寮の「正と負の評価」の一覧について、図10からは、前期と後期の比較において、次の①～②の特徴が見出された。①「孤独だ」、「日本に関する情報が入らない」、「日本語でのコミュニケーションがない」が後期にそれぞれ29.4%、11.8%、5.9%増加した。また、「食費が高くつく」、「プライバシーが守れる」が後期には29.9%、29.5%減少した。②「自由だ」、「寮の管理人が親切だ」は前期と後期が同一の70.6%であり、評価に変化がなかった。

第4に、上述の第1～第3の考察から、寮では、「HSの負の評価」であった「自由がなく窮屈だ」が「寮の正の評価」では第1位（前期、後期共に70.6%）を占めており、反対に、「HSの正の評価」であった「日本語コミュニケーションの練習と上達」（前期59.7%、後期58.7%）が、「寮の負の評価」の第2位（前期41.2%、後期47.1%）を占めていて、寮とHSの正と負の評価は対照的な位置付けであることが理解される。同様に、「HSの正の評価」であった「日本人家族との暮らし経験による学び」が、寮では「日本家庭での経験ができない」や「日本語でのコミュニケーションがない」などの「負の評価」となって示された。すなわち、HSと寮は相補的な関係にある滞在形態だということである。

しかしながら、「5.5 寮の『正の評価』と『負の評価』の下位項目について、及び前期と後期の比較」の中での記述例の中で、「せっかく日本に来たのに、寮では自国の生活内容と変わらず、（日本で）HSをしている学生の経験と大きな差がある」が示すように、主たる留学目的である「外国語習得、異文化コミュニケーション・異文化理解及び異文化接触の体験」の観点からは、寮の滞在経験の「負の評価」は、留學生活の貴重な体験と学習の機会を逸していることを意味し、またその点を指摘されていることで今後課題を残している。

7. まとめ

本論の結果と考察から、調査参加者の留學生の86%がHSのサポートに満足し有益だと評価していることがわかった。この満足度は同じ期間に寮に滞在した留學生と比較しても満足度の年間平均値は高い結果であった。

本論のまとめとして、HSは、既述の満足度と評価内容が示すように、有益である場合も有益でない場合も含めて、留學におけるコミュニケーション能力と異文化接触・異文化理解及び異文化社会適応を高める場として留學生から評価されていると理解される。

本論と関連した今後の研究のために、本論の分析結果から、ソーシャル・サポート・ネットワークの中でのHSのサポートの役割を以下のようにまとめておきたいと考える。

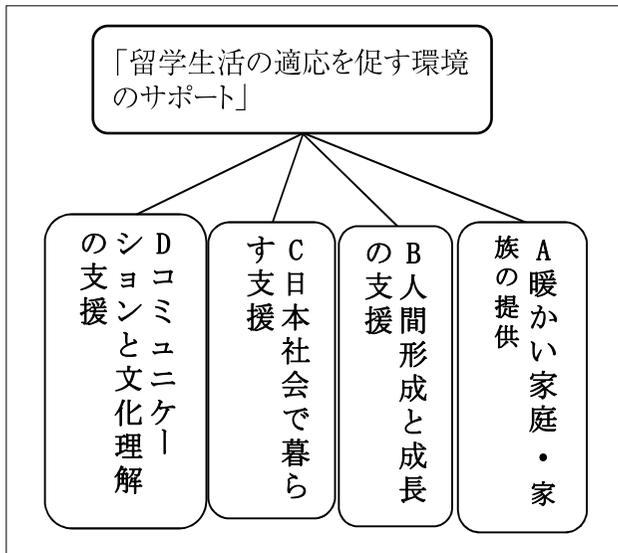


図12 HSの「留学生活の適応を促す環境のサポート」

本論での留学生自身によるHSに対する評価の分析から、HSの有益な正の評価のサポート項目として、内容分析により、下記の7つの下位項目が見出され、以下の1~7に分類された。

1) 日本語コミュニケーションの練習と上達、2) 暖かい家庭と家族の提供、3) 日本社会で暮らす支援、4) 日本人家族との暮らし経験による学び、5) 日本文化の理解と学習、6) 良い食生活と住居の保障、7) 人間形成と成長の

支援、以上の7項目の中から、「1) 日本語コミュニケーションの練習と上達」及び「5) 日本文化の理解と学習」をHSでの「コミュニケーションと文化のための学習」として一つにまとめて、「コミュニケーションと文化理解の支援」として一括し、また、「日本人家族との暮らし経験による学び」及び「良い食生活と住居の保障」を、「日本社会で暮らす支援」として一括する。そして、「正の評価」のサポートの7項目全体を「A. 暖かい家庭・家族の提供」、「B. 日本社会で暮らす支援」、「C. 人間形成と成長の支援」、「D. コミュニケーションと文化理解の支援」のAからDの4つの項目にまとめて、HSの「留学生活の適応を促す環境のサポート」として、ソーシャル・サポート・ネットワークの中でのHSのサポートの役割の一つと捉えて位置付けを行う。HSの「留学生活の適応を促す環境のサポート」と、4つの下位項目は上図12⁽¹⁾のように示される。

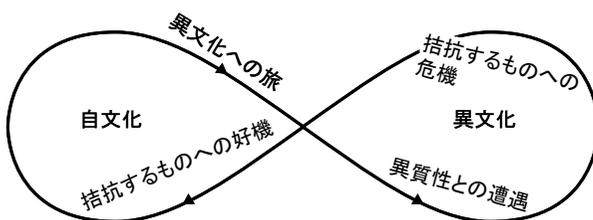
HSという滞在形態について、留学におけるその適否と意義は、本論の以上のような結果と考察から、有益な場合も有益でない場合も含めて、留学目的である1) 外国語の習得、2) 異文化コミュニケーション・異文化接触体験および異文化理解、3) 人間形成と成長、に適った場として有意義であり、留学における滞在形態として相応しいものであると考察される。

注

(1) 本論題目の「有益なサポート」は、記述調査において「HSまたは寮の滞在経験において最も有益で肯定的だった点や満足した点は何か」という質問の、「有益で肯定的だった点や満足した点」の概念をまとめて簡約化して用いられている。また「有益でないサポート」とは、Cohen & Syme (1985: 4) によれば、ソーシャル・サポートは他の人から与えられる資源と定義され、資源とは潜在的に役に立つ情報や物資や事

柄を広く含み、その観点からソーシャル・サポートは健康と幸福についての肯定的な効果と共に、健康と幸福に反する否定的な効果の観点も含まれて広義に解釈され得ると考えた。

- (2) この仮説は Amir (1969) の研究に端を発し異民族間では相互の接触が多いほど偏見の減少や相互理解の向上が進むというものであるが、Kleinburg & Hull (1979) は、これを留学生研究に適用し「修正接触仮説」と称した。
- (3) 調査では質問紙と面接の両方を行ったが、本論では質問紙による調査結果のみを扱い、面接の結果については原田 (2011b) で扱った。
- (4) ここで言う寮とは、大学直営のものではなく、業者が大学生用に経営する寮である。
- (5) 本来、HS に対する対照事例として参考にするためには、同程度の寮滞在者の人数構成が必要であり望ましい。しかし、この K 大学は、当初から HS を中心とした滞在形態を留学生に推奨しており、そのため HS をする留学生数の方が圧倒的に多い。近年、K 大学がホストファミリーの応募者を厳選していることも理由となって、留学生の増加と共にホストファミリー数が不足してきている。また、留学生の中には寮を希望する学生も少数ながらいることもあり、最近では、留学生に寮に滞在の選択肢も提供している。
- (6) 本論の留学プログラムでは、新学期が9月に開講し翌年の5月に閉講するので、学年暦が二年に跨っている。
- (7) 「食費が高くつく」の項目は、「1. 日曜と祭日には食事が出ない」、の項目の内容と関連しており、「日曜と祭日には食事が出ず、食費が高くつく」のように、一項目にまとめても良いとも考えられる。それを敢えて別立てで二つの項目としたのは、HS で「6. 良い食生活と住居の保障」という「食の保障がある」ことに対する正の評価に対し、寮では日曜と祭日には食事が出ず留学生にとっては食の保障がないということへの負の評価と、「食費が高くつく」という経済的な負の評価の二観点から、「日曜と祭日には食事が出ない」と「食費が高くつく」と二つに分けて捉えたためである。
- (8) 大坊 (2008) によると、「社会的スキルは階層的な構造をなすものであり、その基本要因は、自分のメッセージを適切に表出し (記号化)、他者のメッセージを的確に把握できる (解読)、コミュニケーション・スキルという基礎スキルに求められる」とある。
- (9) ダブル・スウィング (double-swing)



Yoshikawa (1987) は、異文化適応の過程を、1) 接触 (contact) 2) 不統合 (disintegration) 3) 再統合 (reintegration) 4) 自律 (autonomy) 5) ダブル・スウィング (double-swing) の5段階に整理し、左図の

ように、自文化と異文化の統合と不統合の揺れ動きとして捉えている。5段階目では、自文化と異文化の両方の視点から発想ができる。

(10) 詳細については原田 (2011a) を参照のこと。

引用文献

- 岩男寿美子・萩原滋 (1988) 『日本で学ぶ留学生』 勁草書房。
- 浦 光博 (1992) 『支えあう人と人～ソーシャル・サポートの社会心理学』 セレクション社会心理学 8, サイエンス社
- 江淵一公 (1991) 「在日留学生と異文化間教育」 『異文化間教育』 5, pp.4-20, アカデミア出版会
- 小澤理恵子 (2001) 「異文化間トランスの＜耐性＞と＜寛容さ＞について」 『異文化間教育』 15, pp.31-52 異文化間教育学会, アカデミア出版会
- 佐藤郡衛 (1999) 「異文化間コミュニケーション」 『国際化と教育—日本の異文化間教育を考える』 放送大学教育振興会, pp.129-143.
- スコット, P. M. (宮城薫訳) (1989) 「ソーシャルサポート」 『医療・健康心理学』 中川米三・宗像恒次 (編) 福村出版, pp.200-232.
- 大坊郁夫 (2008) 「社会的スキルの階層的概念」 『対人社会心理学研究』 8, pp.1-6.
- 田中共子 (1998) 「在日留学生の異文化適応：ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から」 『教育心理学年報』 37, pp.143-152.
- 田中共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』 ナカニシヤ出版
- 手塚千鶴子 (1991) 「ホームステイと異文化間コミュニケーション—日本人ホストファミリーからみた留学生の場合」 『異文化間教育』 5, pp.135-144, アカデミア出版会
- 徳永あかね (2005) ソーシャル・サポートの尺度を用いた分析の試み—別科から進学した中国系留学生を対象として— 『外語大における多分化共生：留学生支援の実践研究』 神田外国語大学附属 異文化コミュニケーション研究所助成による成果報告
- 原田登美 (2011a) 「ソーシャル・サポートから見たホームステイと日本語習得—サポートが『日本語能力向上の認知』に及ぼす影響—」 『留学生教育』 16, pp.25-36.
- 原田登美 (2011b) 「留学生の自由記述の回答に見る—ホームステイ評価とソーシャル・スキルの使用」 (未公刊)
- 藤野瑠弥・田中共子 (2006) 「ホームステイ場面におけるソーシャルスキル：在日留学生と日本人ホストファミリーの視点から」 『留学生教育』 11, pp.101-100.
- マグワイア, L. (1994) 『対人援助のためのソーシャルサポートシステム』 小松源助・稲沢公一訳, 川島書店
- 八島智子 (2004) 『第二言語コミュニケーションと異文化適応—国際的対人関係の構築をめざして』 多賀出版
- 山本直美 (1996) 「ホームステイにおける異文化間コミュニケーション—日本人ホストマザーの対人意識の分析から—」 『日本語教育・異文化間コミュニケーション—教室・ホームステイ・地域を結ぶもの—』 鎌田修・山内博之編, (財) 北海道国際交流センター, pp.149-173.
- 横林宙世 (2002) 「留学生のアカルチュレーションと異文化間トランス」 『異文化間教育』 16, pp.32-48, アカデミア出版会
- Adelman, Mara B. (1988) Cross-Cultural Adjustment: A Theoretical Perspective on Social Support. *International Journal of Intercultural Relations*, 12, pp.183-204.
- Amir, Y (1969) Contact Hypothesis in Ethnic Relations, *Psychological Bulletin*, 71, pp. 319-342.
- Bochner, S. (1972) Problems in Cultural Learning. In S. Bochner & P. Wicks(Eds.) *Overseas students in Australia*. New South Wales, Australia: New South Wales University Press.
- Brislin, R. W. (1981) *Cross-cultural encounters: Face-to-face interaction*. Elmsford, NY:Pergamon Press
- Coehlo, G. V., Yuan, Y.T., & Ahmed, P.I. (1980) Contemporary uprootings and collaborative coping : Behavioral and societal responses. In G. V. Coehlo, & P. I. Ahmed (Eds.), *Uprooting and development*

- Cohen & Syme, S. L. (1985) Issues in the Study and application of social support. In S. Cohen & Syme, S. L. (Eds.) *Social support and health*. Orland, Florida: Academic Press, 3-22.
: *Dilemmas of coping with modernization*. New York Plenum Press. pp.153-186.
- Fontaine,G (1986) Roles of social support systems in overseas relocation: Implication for intercultural training, *International Journal of Intercultural Relations*, 10, pp.361-378.
- Furnham, A. and Bochner, S. (1986) *Culture Shock*. London: Routledge.
- Frank, V. (1997) Potential negative effects of homestay. Middle Atlantic Conference of the American Association for the Advancement of Slavic Studies, Albany, NY, March 22, 1997.
- Hashimoto, Hiroko (1994) Language Acquisition of an Exchange Student within the Homestay, Environment, *Journal of Asian Pacific Communication*, 4(4) , 2, pp.209-224.
- House, J. (1981) *Work Stress and Social Support*, Reading: Addison-Wesley.
- Klineberg, O. & Hull, W.F. (1979) *At a Foreign University: An International Study of Adaptation and Coping*. New York: Praeger.
- Knight, M. & Schmidt-Rinehart (2002) Enhancing the Home stay: Study Abroad from the Host Family's Perspective, *Foreign Language Annals*, 35,2, pp.190-200.
- Martin, Gail M. Revised version of a paper presented at the conference of the Society for Intercultural Training, Education, and Research (Mexico City, Mexico,1979).
- Rivers, W. P. (1998) Is being there enough? The effects of homestay placements on language gain during study abroad, *ACTEL* 31, 4, pp.492-500.
- TAKAI, Jiro (1991) Host Contact and Cross-Cultural Adjustment of International Students in Japan: Assessment Instruments and Some Descriptive Statistics 『大学論集』 20. 広島大学教育研究センター 〔編〕 pp.195-228.
- Ward, C., & Kennedy, A. (1994) Acculturation, strategies, psychological adjustment, and sociocultural competence during cross-cultural transitions. *International Journal of Intercultural Relations*, 18, pp.329-343.
- Wilkinson, S.(1997) Separating fact from myth : A qualitative perspective on language learning during summer study abroad. MLA Convention, Tronto.29 December 1997.
- Wilkinson, S.(1998a) Study abroad from the participants' perspective: A challenge to common beliefs, *Foreign Language Annals* 31 (1) pp.23-39.
- Wilkinson, S.(1998b) The nature of immersion during study abroad: Student perspectives. *Frontiers.*; Fall 1998: pp.121-138.
- Yoshikawa, M. J. (1987) Cross-cultural adaptation and perceptual development. In Y. Y. Kim. and W.B. Gudykunst. (Eds.), *Cross-cultural adaptation current approaches*. Newbury Park: Sage Pub. pp.140-148.